

[OAP要旨]

## 超高齢者（95歳以上）の大腿骨近位部骨折の検討

輪 湖 靖<sup>1)</sup> 中 村 順 一<sup>1)</sup> 北 崎 等<sup>2)</sup> 高 澤 誠<sup>3)</sup>  
新 井 玄<sup>2)</sup> 宮 本 周 一<sup>1)</sup> 三 浦 道 明<sup>1)</sup> 大 鳥 精 司<sup>1)</sup>  
鈴 木 崇 根<sup>4)</sup> 中 嶋 隆 行<sup>3)</sup> 折 田 純 久<sup>1)</sup> 高 橋 和 久<sup>1)</sup>

(2016年12月1日受付, 2017年1月13日受理)

【目的】日本は近年, 世界でも有数の高齢化社会が進んでおり, 大腿骨近位部骨折は増加傾向にある。今回の目的は超高齢者（95歳以上）の大腿骨近位部骨折後の歩行能力や生命予後について検討することである。

【方法】2008年10月から2013年9月に当科にて治療を行った95歳以上の大腿骨近位部骨折症例を対象とした。手術を行った手術治療群31例（男性5例 女性26例 平均年齢96.5歳）は歩行能力獲得に関連する因子と生命予後について検討し, 保存治療群13例（男性1例 女性12例 平均年齢96.3歳）に対しては生命予後の検討を行った。

【結果】手術治療群では術前に歩行機能が残存していた28例中12例（43%）が歩行能力を再獲得できた。術前の歩行能力が高い群では歩行再獲得率が有意に高く, 認知症があると歩行再獲得率が低い傾向であったが有意ではなかった。術後1年の生存率は歩行再獲得できた群は100%, 歩行不能となった群は51%と有意差があった。手術治療群の1年生存率は70%であり, 保存治療群の38%より有意に高かった。

【考察】超高齢者の大腿骨近位部骨折であっても手術を行い, 術前の歩行能力が高かった群では諸家の報告と比較しても, 良好な予後となった。手術適応は年齢だけでなく, 術前のADLを考慮して決定するべきであると考えられた。

**Key words:** Hip fracture, 95years old and older, Survivorship

---

<sup>1)</sup> 千葉大学大学院医学研究院整形外科

<sup>2)</sup> 千葉県立佐原病院整形外科

<sup>3)</sup> 東千葉メディカルセンター整形外科

<sup>4)</sup> 千葉大学大学院医学研究院環境生命学

Phone: 043-226-2117. Fax: 043-226-2116. E-mail: njonedr@chiba-u.jp